

(解説) 都鳥

登場人物の女性は遊女だろうか。新吉原の遊女なら、廓の内から出られないので、舟で彼氏を待つことはない。それに大門おちもんが閉まるのは四つ時で、今の夜十一時頃だ。江戸幕府が決めた門限は厳しいのだ。とはいえ何事も裏道はあったであろうから、遊廓内の裏茶屋うらちや(ラブホ)が舞台なのかも知れない。

名にし負はば いざ言問うはむ都鳥

我が思ふ人は ありやなしやと

という伊勢物語ありわらのなりひらにある在原業平の歌が引き合いに出されている。

都鳥は、くらはし嘴と足が赤いユリカモメのことである。都からやって来た人々からは、鳥の名前は何と云うのかとよく聞かれ、「都鳥よ、私の恋人は今も元氣かな」って、行き交う人からしよっちゅう声を掛けられるらしい。

歌詞の最後は「夏の夜」とあるので、隅田川兩岸の桜が葉桜となつて川面に映り、また別の趣きのある心地よい季節であろう。

隅田川に架かる言問橋あたりは船遊びの場所である。渡れば対岸は向島である。この辺りからは、本龍院まつちやましようてん(待乳山聖天)が見える。

待乳山聖天の「待乳」は、遊廓のある土地柄からか、一寸と意味深な当て字であるが、寺の山号でもある。本来は「真土まつち」と言って、造成土ではない本当の土地を意味する。

寺のシンボルは大根と巾着きんちやくである。大根足だいこんあしと云うくらいだから、健康を願ひ、巾着は商売繁盛を願うのである。この寺は花柳界の信仰が厚いと言うから、彼氏を待つこの女性も素外、芸者さんかも知れない。

都鳥は空中で仲間どうし、羽を合わせる仕草をするので、抱き合つて情交を結ぶとしたのであろう。

「深み草」は、唐代に王者に風格のある花と言われた牡丹ぼたんの異名である。牡丹は王者から類推される異名を多く持つ。

深い赤の牡丹は、その丹色たんしよくが最も美しいときれ、「深み草ふかにくさ」が「深み草」と変つた。その語呂は深い思ひを表わす花になる。

情けの深みにはま嵌るのだ。

セックスに臨んで、男女とも着物は一度解いたら終わりである。後は生身の肌を合わせたり、離れたりと、一晚中やりまくったのである。他に解釈の仕様もない。もう少し別の表現もあるのではなからうか、喜左衛門さんに聞いてみたいものだ。

衣々きぬぎぬは後朝とも書く。互いの衣を掛け合つて、共寝した朝という意味である。明け六つは日の出の30分前の時刻で、それが別れの時刻である。男女とも朝帰りである。

因みに江戸では、本石町、上野寛永寺、市ヶ谷八幡、赤坂田町成願寺、芝増上寺、目白不動尊、浅草寺、本所横堀、四谷天龍寺の九箇所が、この順に江戸の「時の鐘」を鳴らす所であった。江戸城付近から始まり、反時計回りに丘陵部から低地へと、江戸の周縁部に音を繋いでいる。

「憎や明くる夜」なら、もう少し居て欲しいという意味にもなろうが、「つれない」のであるから、事を終えた男は賢者タイムで、サツサと帰ろうとするのである。

さて、この曲の初演より四十年前の文化十一年(1814年)に、歌舞伎「隅田川花御所染はなのごしよぞめ」が江戸の市村座で上演されたが、その中で隅田川の場面で使われた曲が「都鳥」である。「清玄桜姫物」と呼ばれる、落ちぶれた悲しい物語を「都鳥」という隅田川での恋心という倒錯で表現している。

「都鳥」は、今日までの長い時間を長唄曲として弾かれ続けてきた過程で、様々な前弾き(歌や語りの前に奏す)や替手(原旋律と合奏する別旋律)が生まれている。

令和五年六月十日

大中臣正比呂 記

